

日本聖公会 全国青年ネットワークニュース

来夏、沖縄で全国青年大会

これまで四年ごとに開催されている全国青年大会が、来年、二〇〇八年も開催されることになりました。

開催期間は、二〇〇八年八月二〇日（水）から二三日（土）までの三泊四日。開催地は、沖縄です。（沖縄での開催に至った経緯は、四面の青年担当者の集いの記事をご参照ください。）

青年大会は、教会に青年世代が少ないと言われる、現時点では教会の諸活動と密接な接点を持っていないとも、隠された青年が相当数いるのではないかとということ、またそうした青年たちは仲間を発見すれば再び活性化するのでないかということ、しかしそのための具体的な方策を各個教会・教区レベルで企画立案するだけでは不十分で

はないか、という思いの中で、一九九二年より四年に一度開催されていきました。内容的には毎回少しずつ異なるものの、基本的には、青年は、日本聖公会の将来の宣教の担い手ではなく、現在の担い手である、という視点から、日本聖公会の宣教の課題を分かち合い、これからの私たちの教会の働きを考えるものとなっていきます。

今回の具体的なテーマや詳細なスケジュールは未定ですが、沖縄には全国の教会が知るべき歴史と現実、また豊かな自然や文化などがあり、多くの経験ができることが期待されます。

沖縄ということ、交通費の心配をしている青年もいるかもしれません。前回の長崎の大会では、地域に運営を委ねるといって、交

通費もこれまでの大会よりも負担が多くなることから、どうなることかと思われていました。しかし、蓋を開けてみれば、プログラムも素晴らしいものでしたし、不安だった資金面も、全国の教会が、自分たちの教会の青年を青年大会に送り出すために多額の援助をしてくださったことで、これまでの大会の運営費レベルで開催することができました。

全国から青年が集う機会はないかなありません。一九九二年からの連続参加の方も、何度か参加したことがある方も、しばらく参加できなかったけど来年は行けるかもという方も、初めて参加する方も、大歓迎です！

皆さま、万障お繰り合わせの上、沖縄でお会いしましょう！（管区青年委員会委員・河崎真理）

日韓青年セミナー、今年はソウルで開催

八月九日から十四日まで、韓国ソウルにて日韓聖公会青年セミナーが開催されました。一〇年目の区切りをつけ、新たな体制となつてから

このプログラムの参加するのは四回目ですが、今年はいつもと心が構えが少し違つたように思います。毎年、日韓の間に未だ横たわる深い溝を感じながら、

今まではほとんど何もしてきていませんでした。頭では何かしなければと思いつながら、日々の忙しさにかまけ、期間中に感じた感動も薄れてしまつて

いました。しかし大学生活も折り返しとなった今年、絶対に何か自分の中で変えたいという思いが非常に強かつたのです。

結果的に、事前準備での靖国神社のフィロドリップを含め、今回のセミナーはとて

も実りの多いものになったと思います。中でも元「従軍」慰安婦のハルモニ（おばあさん）たちが暮らすナム

の家への訪問は私の中で大きな財産となりました。今まで彼女た

ちのような人がいることをほとんど知らずに出会いはとても衝撃的で、かつ悲しいものでした。そして日本でも安穩と暮らしていただ

けでは決して知ること

のなかつたであろう真

実に胸を痛めることができ、本当に良かったと感じています。

私は今、セミナーだけでは知ることのできなかつた元「従軍」慰安婦たちの現実を少しづつではありますが、

調べ始めています。彼女たちのドキュメンタリー映画を見たり、講演会に参加したり、ま

だまだ自分から何か発信してゆく立場まではいきませんが、自分なりに動き出すことができると

思います。今はまだ小さな芽でしかないかも知れないが、大切に育ててゆきたい。

そしてより



多くの人に私を感じた思いを共有していただきたいと思つて

最後に、これから

ずつと先も、日韓の

平和が染み渡るまで

このセミナーが続き、

私たちの後に続く人々が絶えないことを願いつつ、このプログラムの報告と変

全国青年ネットワークのブログ (http://youthnisk.exblog.jp) では、様々な情報を随時アップデートしています。どうぞご利用ください。

東京



東京教区では毎年九月に教区フェスティバルが開催され、多くの信徒が礼拝と午後の催し・フリーマーケットなどを楽しんでいます。実行委員会も半年前から企画・準備を重ねて本番に臨みますが、今年の委員は「青年一層」特に二十代が割合的に多かったのが特徴です。イベント担当部会では既製のお弁当取次をやめ、「同じ釜の飯を食べる」考えを前面に出して自分たちで「おにぎり」を作って販売する事を若者が発案しました。また『前夜に人を集めて「にぎら☆ナイト」と称して楽しく握る』アイデアも生まれ、私も含めてイベント担当のおじさん、おばさん達はそのアイデアにまんまと乗ってしまっただけでした。私達は様々なハードルをクリアしていきました。運営面よりも厄介だった衛生面にお

いて食中毒の恐怖と戦いながら、会場・器材の消毒、準備などの装備品等の準備、試験的調理、細菌検査等々あらゆる準備をして本番に臨みました。もちろん、並行してフェスティバルの本来業務での役割も進めていきました。「にぎら☆ナイト」には老若あわせて四十人が参加しましたが、中心的作用(計量、包装など)を担当していたのは主に二十代の人たちでした。そうして作った五百セット(二個人入り)は全て当日会場で完売しました。今回、中間層四十代として彼ら若者から年配者まで様々な年代と共に働きましたが、アイデア肉付け作業、役割分担、遠慮のない議論そして想像を超えた良い形で実行というところが実現できたと思います。そこには共通の目標に向かっているいろいろな意味での世代間のギャップを乗り越えた姿がありました。現在の教会にはミニストリーも必要だがこのようなケミストリーも必要ではないかと感じています。(岡村忠平/聖パウロ教会)

神戸

神戸教区 青年交流会 広島キャンピング報告
 《ONE STEP FORWARD》
 十月十二日〜十四日に広島で行われた青年交流会に参加してきました。私はお隣の島根県に住んでいるのでたまに友達と遊びに行ったり、小学生の時も修学旅行が広島だったり、私にとってはとっても身近でよく知っている県でした。けど今回の旅で今までの私は全然広島のこと知らなかったのだから思いました。

なんと行って原爆について。小・中・高と平和学習でいろいろ勉強もしましたし、原爆資料館も何度も行った事があった。だから最初は「また原爆についてかあ...」って正直思っていました。だけど、今田さんというピースボランティアの人と一日一緒にいろんなところを回り、自分はこれほどまでに原爆の上辺しか見てなくて原爆について知って居るつもりでいたことに気が付きました。原爆資料館も今回で四回目くらいになるのに今まで全然気が付かなかった事もたくさんあったし、いろんな建物を見ているうちに初めて涙が溢れ、とても怖くなりました。原爆が落ちた時、外国のとある人がこんな事を言っていた。「私は原爆が落ちた時、何マイルも離れた場所において、肉体的には何も傷を負わなかった。けれど



も、心は深く傷付いた。確かに私達はその時まで生まれてもいないからこの人と同様に体験したわけではない。だからその人たちの気持ちになることは出来ない。だけれどそれをどう感じ、これから活かし、行動に移せるかがこれからの私たちに課せられた大きな課題だと思ふ。「広島に来て原爆について感じたコトを人に伝えるコト、伝えなくてはいけないコト」。私はまづもつと広島や原爆について知り、考え、それを人に伝えて行こうと思いました。みなさんも来年の八月五〜六日の平和礼拝に参加して私たちと一緒に原爆や『平和』について考えてみませんか？(浜田キリスト教会 大橋奈々江)

九州

九州教区「平和を考えるプログラム」では今年度の夏、まず七月末の聖保連全国保育者大会に平和ガイドとして参加、次に八月八〜十日には「長崎に立つ2007・夏」を開催しました。以下、参加者の声をお届けします。◎聖保連第五回全国保育者大会 参加者の声より「目で見て話を聞いた上で行ったフィールドトリップはとても印象深いものでした。段階を踏ませて下さった九州教区の方々にとっても感謝しています。今まで当り前のようであった生活や人が亡くなってしまう悲しき、辛さ、そして新しい生活に至るまでの大変さ、食の違いを、身をもって感じる事ができ、たくさん先生方と歩いていく中で分かち合うことができました。私の中で一番心に残ったのは、戦争をなくすために「全ての人々を愛し、愛し、愛すること、すぎがないう言葉です。」◎聖保連第五回全国保育者大会 グループでつくった折りより「神様 どうしてですか？心が痛みます。本当に失われなくていい命が失われました。原爆は落下ではなく

投下されたのです。日本がアジアの国々、中国や韓国、満州に戦争をしかけたければ...この広い街が一瞬にしてなくなりました。一つひとつの家には愛する家族がいました。今本当の強さを知りました。被爆し、家族や友人を失い、傷ついて生き抜いて今の日本を築いてくれた人の強さを。本当のつらさや悲しみを。知りつつ、しっかりと歴史を見つめ、心を開けて受けとめていく強さを。私は子ども達に伝えます。小さい時から平和を守る大切さを。命の尊さを。家族への愛の素晴らしさを。本当に大切なことを語り継ぐ使命を。二〇〇七年七月二日 長崎にて祈ります アイメン

北海道 八月一日〜二日、旭川市江丹別町のオサラップ牧場にて、夏のキャンピング「ネイチャージャンボリー二〇〇七」が行われました。今回で四回目の開催です。昨年までは、札幌中心の参加者でしたが、今回は札幌からの参加者だけでなく、深川、小樽、紋別からの参加者が与えられました。スタッフが最初に考え、祈っていたことが、今回スタッフも含めて三〇名の青年が集められたことに、神様に感謝したいところです。さて、今回のキャンピングの内容はというと、旭川聖マルコ教会の信徒で荒川信基・美恵子夫妻の指導で、酪農の体験と、命の大切さを学んだことでした。二日目は、カレーコンテストを行いました。お昼には、植松主教、木村司祭様が、来ていただきました。夜は、牧場で育った牛肉をみんなでおいしくいただきました。来年は、もっとたくさんの参加者が与えられたいと思います。(旭川聖マルコ教会・能勢和孝)

CCEA



十月三日から九日までシンガポールで開催された聖公会東アジア協議会(CCEA)にユースオブザパーとして管区から派遣していただいた。CCEAは、アジア地域の聖公会の教会で規模が小さいために管区を形成できない教会が集まって親睦を深めるために開催されているそうだ。参加国は日本、台湾、フィリピン、マレーシア、大韓民国、シンガポール、香港(中国)、オーストラリア、ミャンマー。日本聖公会は早い時代から教区と管区の組織が成されており、以前はオブザパーの立場だったが、現在は正式なメンバーになつていく。総会は四年に一度開催され、管区または教区を代表する主教、司祭、信徒、青年の

四名が参加する。今回の総会は地元スタッフを含め百人前後のメンバーが集い開催された。本総会のスケジュールは、十月四日の訪問と研修、七日の各教会訪問と礼拝をのぞけば、基本的にはセッションや報告の繰り返しで、毎朝聖書の勉強と礼拝から始まる。総会の中で印象的なことを二点まとめておきたい。

(一) セッションや報告の時間を通して、特に印象的であったこと。現代全世界で宗教観対話が積極的に行われる中で、「私たちの所属する聖公会のアイデンティティはどのような明確化されていくのだろうか」という問題だ。たかさんの宗教が混在する中、とりわけマジソリティーで、私たち聖公会のアイデンティティはどのように表現されて、どのような問題になつてくるのだろうか。組織の問題であるのか、もしくは、信仰の問題であるのか。総会では、結論を考へるような話し合いを持つ時間はなかった。各教区・管区がこの問題を国に持ち帰る必要がある。私たちは聖公会という一つのアイデンティティを形成し、より一層の聖公会の道といふものを熟考していかねばならないのかもし

ない。(二) 十月七日、日本聖公会の四名はホテルからも近い聖ジョージ教会(聖公会)の午前十時からの礼拝と、午後三時からの日本人礼拝に参加させていた。この聖ジョージ教会の主日は午前八時、午後六時からの全四回の礼拝が行われるのである。私はここでシンガポールの聖公会が現代のニーズに合わせて様々な礼拝形式を取り入れ、宣教を試みているのを感じたのでみなさまに伝えたい。

午前八時からの礼拝はハイチャーチ式の礼拝が行われ、聖餐式も毎週行われる。午前十時からの礼拝は第三週だけ聖餐式をするという形をとおり、どちらかといえば、説教中心である。牧師はスラックスとカッターシャツにカラーのついた様相で説教をするところを見る。私のある聖公会の礼拝とはひと味違う。礼拝の形式は変化する。古き伝統ある礼拝を変化させ無くしてしまふというわけではなく、昔のものは昔と同じように今も存在し、これからは保障されているというようないふふな気がした。(京都聖ステパノ教会・松山健作)

派は違えども日本語の礼拝を守る組織として三十年間単立の立場で信仰を守る人々の礼拝である。キリスト者であり、日本人であるということからコミュニティを形成し信仰を守る姿に、異国の地を努力してきたパワーをかいま見ることができた。この集団は自分たちの教会を持たず、聖ジョージ教会を借りる形で毎週の礼拝を守っていることであつた。最後に午後六時からの礼拝であるが、これは出席できなかったが、これは出席できなかったが、若者のための礼拝だそうである。音楽中心で、元氣あふれる歌い続ける礼拝なのである。私は午後五時過ぎまで聖ジョージ教会にいたが、その頃には若者がぞろぞろと集まり、ドラムやギターの音の調整や練習をしていた。日本の聖公会では、まず見たことのない楽器が奏楽で使われているのだった。これには驚いた。

聖ジョージ教会での礼拝を通して感じたこと、それは、現代のニーズに合わせて礼拝の形式は変化する。古き伝統ある礼拝を変化させ無くしてしまふというわけではなく、昔のものは昔と同じように今も存在し、これからは保障されているというようないふふな気がした。(京都聖ステパノ教会・松山健作)

京都

去る六月九日(一〇日)、金沢聖ヨハネ教会にて京都教区の青年有志の集まり「ぼこぼこ」が開催されました。今回の「ぼこぼこ」は三回目。毎回、一〇名ほどの青年たちが夕食を囲み、いろいろな話をしながら教区での交流を深めています。第一回は昨年一月に大津聖マリア教会、第二回は今年二月に京都聖ステパノ教会で行われました。第三回となった今回の金沢での「ぼこぼこ」二日目は、富山聖マリア教会まで足をのばし、上越・北陸合同礼拝に参加しました。

「ぼこぼこ」には決められたテーマがないため、話題は多岐にわたります。自分の趣味や特技、仕事や結婚、将来の展望、教区の仲間の話、各教会の近況など、尽きることがありません。いろいろな人の話を聞き、その人たちの思いに触れ、私にとつては自分自身を見つめ直す機会となりました。日常とは違う環境に身を置いたり、自分とは違った感性を持つ人と話すことは、新しい自分に出会えるチャンスです。

この「ぼこぼこ」が、新しい出会いの場所、自らを勇気づけ、高めてくれる場所として、ひとりで多くの人の交流が深められる会になることを期待しています。京都教区青年報告会「アジアの鼓動 豊かな出会い」報告会の主催者として感じたことを書きたいと思えます。十一月二日、京都教区センターにて今年海外体験をした二人の青年から報告をして頂きました。参加者十二名。まず、浮田倫太郎さん(大津聖マリア教会)からは日韓聖公会青年セミナー(八月九日~十四日・韓国ソウル)に参加した体験を報告してくださいました。浮田さんが、ピースメーカーとなるとはどういうことかとの主題講演から豊かな刺激を受けておられたことにまず私は心を動かされました。講演のキーワードは「隣人から習う」。プログラムの最後の聖餐式では、平和の挨拶を交わした時涙が溢れてきたこと、その瞬間自分たちが平和の種になつていくことを熱い思いと共に語ってくれました。そういう体験をされてきたことはかけがえのない宝物となつたに違いない、と思いました。早速参加者同士でネットを使い自分たちに何が出来るのかを模索しているとのこと、その具体的行動力に、すごい、見習いたいと強く思われました。浮田さん自身が、この出会いを未来に続く具体的な生き方の大切な機会として捉えておられることに、私たちは多くのことを教えられるのではないかと思います。

次に、松山健作さん(京都聖ステパノ教会)は、東アジア聖公会協議会(十月三日~九日、シンガポール)の総会に参加された体験を報告してくださいました。松山さんの報告は日常勉強しておられる韓国語を駆使しての交流の様子、新しい仲間と出たいと言ふ熱意が伝わり、体験したことを自身の四つの関心にとめられました。その四つの項目はそのままアジアや世界の主要な課題であるなあと、思う時、松山さんの視点や関心がこれまで参加された日韓青年キャンプの経験や自身の勉強の深化充実を物語らせているように感じました。ちなみに四つの関心事とは…一、聖公会のアイデンティティ。二、アフリカの宣教スタイル。三、教会の多様な取り組み。四、各地域毎の青年の課題の多様性。

お二人ともモチベーションが高く、来年沖繩で開催予定の全国青年大会への参加を強く希望しておられ、とても頼もしく感じました。そして報告原稿をきっちり作ってこられていて、自分の思いをまとめ伝えることを地道にしておられる姿には、私自身も見習いたいなあと思いました。十一月三十日(金)、十二月一日(土)と三重県の上野聖ヨハネ教会で今年三回目の青年の集まり「ぼこぼこ」を行います。アジアの報告を聞いて私たちが、来年の青年大会に向けての準備を始めようとしています。上野へ全員集合!浮田さんや松山さんも駆けつけます。アジア報告の続きを聞きたい方、是非上野へ。私も来年沖繩に行きたい。(京都教区青年担当 司祭 小林聡)

このニュースに掲載されている今後の様々なイベントの詳細に関するお問い合わせは、全国青年ネットワーク事務局のブログでどうぞ。全国青年ネットワークMLでもご案内しています。これを機会にぜひご登録を。Web上で登録可能。

国際聖公会青年ネットワーク会議

九月三日〜七日、ロンドンで行われた国際聖公会青年ネットワークの会議に、日本からの青年代表として参加してきました。この会議では、様々な文脈から集まった人々と各国の青年活動の状況を分かち合うと共に、来年開催されるランベス会議に向けて、世界的な青年活動のアピールをどう行うか、ということ

を話し合う場を持ちました。実際に試してみると、純粋に青年として参加したのは私だけで、後はACCなどのスタッフをしていの方々や、各国でユースアドバイザーやコーディネーターをしている三〇〜四〇代以上の方が大半でした。色々な理由が考えられますが、どの国でも青年活動や青年支援というのは難しい課題であることに違いはなさそうでした。

「認識してもらおう」ということが話し合われました。

プログラムの内容は主に上記のようなディスカッションで、ある程度聖公会のことや文脈を理解していないと参加しづらい難しい内容がほとんどでした。そのため、プログラム中に各国の文脈や過程を共有しながら結論にたどり着く、という

気持ちの面での分かち合いが不十分だったため、表面的・便宜的な議論に終わってしまった感がありました。特に青年活動の部分の共有が何よりも大事だと思われ、それによって得られるパワーのようなものが、こうした国際的な集まりを開く意味にもつながると思われ

るため、その点は少々残念なことであったと思います。

ただ、やはり普段日本の中で過ごしているだけでは決まらずに出会えない人たちが会えない、会議中ではなく隙間の時間（食事のときなど）に分かち合うそれだけの気持ちや情報などからヒントやエネルギーを得たこともあ



（東京教区・聖マルコ教会・京子）

中部

六月二三日〜四日、長野伝道区青年会主催の黙想会「ナルニアを探そう」が、長野県岡谷市にある、やまびこ公園で行なわれました。中部教区内外から二十数名が集いました。講師はC.S.ルイス研究が専門の堀越喜晴さん（長野聖教主教会信徒）。

前日の雨が嘘のように晴れ渡った空の下、参加者は木立の中に腰をおろして、歌い、お話を聴きました。前半は「自然の中のナルニア」後半は「自分の中のナルニア」を探しながら、黙想のときを過ごしました。

二日目。おやき（某青年のお母さんお手製☆）を手に、諏訪湖が一望できる丘やログコテージのテラスなど、各自好きな場所を朝ごはん。自然を満喫した会場をあとにして、岡谷聖バルナバ教会へ。聖餐式の中では、前日の夜練習した聖歌をアンセムで四部合唱しました。礼拝後、信徒さんの心あたたまるカレーを一緒にいただいた。最後に一度全員で歌って、お祈りをして、会を閉じました。たくさんの方に支えられた二日間、神さまに感謝。（上田聖ミカエル及諸天使教会・石田

東北

ユースキャンプ2007 毎年恒例となった東北教区のユースキャンプが今年も八月十三日〜十五日にかけ十和田湖畔にあるヴァイアール山荘にさなみ山荘にて行われました。昨年は雨模様で外でのプログラムが出来なかつたのですが、今年は大自然を満喫できました。参加者は十九名でした。

十四日にはナザレ修女会の十和田の家をお借りして手作りの小龍包（ショウロンポウ）作り挑戦し、皮から手作りしたせいもあって大変美味しく頂きました。その後、パイブルページェントを四つのグループに分けて行いました。各グループはそれぞれに与えられた聖書の箇所を読んで、一言言葉を発しない寸劇で聖書の物語を演じました。どのグループも真剣に取り組み白熱の演技でした。受身の聖書の学びではなく主体的に学ぶことが良かったと思います。

十四日の夕方からは平和の祈りが始まり、ユースキャンプと合同でプログラムが進められました。夕の礼拝を十和田湖畔で行いました。「四つの生命のシンボルによるリタニー」という礼拝式文を用いました。

土・空・火・水という四つの命のシンボルからの訴えに耳を傾けると

全国青年担当者の集い

日本聖公会の各教区には青年担当者が置かれていて、その担当者と管区宣教主事、管区青年委員会委員らが集まる「青年担当者の集い」が、現在年二回のペースで開催されている。七月一六〜一七日に、今年二回目の集いが名古屋学生青年センターにて開催された。

まず、一ヶ月後に控えている日韓青年セミナーの進捗状況について報告があった。青年の育成や教区の青年活動とのリンクを強化すべく、昨年から、各教区からの参加を二名に限定し、全教区からの参加を求める形式を採用しているが、教区によって募集状況にばらつきがあり、今後に向けてその改善策等を話し合った。

次に各教区の活動が報告された。全国には、かなり多様な青年向けのプログラムがあり、それらを相互に活用していけるよう、情報交換を進めようとの話しがなされた。

今回の青年担当者の集いは、一月一三〜一四日に東京にて開催される予定。（全国青年ネットワーク事務局・相原太郎）

今年も主の導きによって十和田湖でのプログラムが行うことができました。主に感謝。（弘前昇天教会／司祭 越山哲也）

発行 **日本聖公会全国青年ネットワーク事務局**
 名古屋市中区宮東町260
 名古屋学生青年センター内
 tel 052-781-0165 fax 052-781-4334
 e-mail youth.po@nssk.org
 www.nssk.org/province/youth/

今回のメインの議題は、全国青年大会についてであった。前回の青年大会は二〇〇八年に青年大会を開催することが話し合われ、開催方法や開催地などについて、各担当者が持ち帰って検討することになった。そして、今回の集いにおいて、まず、青年大会そのものの意義、九州教区の平和を考えるプログラムと長崎での青年大会が開催されるに至った経緯、その後各教区や管区で行われている様々なプログラムなどについて意見交換が行われた。